英文解釈 L01 第 20 講 強調構文で焦点になる部分を読む

学習目標

- 基本的な強調構文を見つけ、元の内容と強調される部分を区別できる。
- 強調される名詞句や時の表現が、元の内容で S・O・M のどの役割を担うか説明できる。
- 強調構文と形式主語 it の構文を構造から区別し、焦点や時制を保って自然な日本語に訳せる。

1. 強調構文は何を強調しているのか

解説

同じ出来事を伝える英文でも、話し手が特に注目してほしい部分は変わる。

例えば、文化祭の看板について、次の出来事があったとする。

The school art club painted a large wooden sign on Saturday.

「学校の美術部は土曜日に大きな木製の看板を描いた。」

この文には、「誰が」「何を」「いつ」という情報が含まれている。出来事そのものを伝えるなら、この語順で十分である。

しかし、看板を描いたのが誰だったかを特に伝えたい場合は、次の形にできる。

It was the school art club that painted a large wooden sign on Saturday.

「大きな木製の看板を土曜日に描いたのは、学校の美術部だった。」

今度は、看板を描いた時期を強調してみる。

It was on Saturday that the school art club painted a large wooden sign.

「学校の美術部が大きな木製の看板を描いたのは、土曜日だった。」

どちらも、看板を描いた人と時期は変わっていない。違うのは、**話し手が情報のどの部分に注目させているか**である。

このように、文の一部分を特に目立たせる働きを持つ構文を、強調構文という。

強調構文の基本形

It is / was ＋ 強調する部分 ＋ that ＋ 残りの部分

It is / was と that の間に置かれる部分が、強調構文の**焦点**になる。

焦点とは、文の中で特に注目させる部分のことである。

本講では、名詞句や明確な時の表現を強調する基本形を扱う。

ここは覚える

基本的な強調構文は、次の順序で読む。

1. It is / was … that という形に注目し、強調されている候補を見つける。
2. 候補を元の内容の中へ戻し、誰が何をしたのか、いつの出来事なのかを確認する。
3. その候補が元の内容で担う役割を判断し、焦点を残して訳す。

It is / was という形だけで強調構文と決めず、元の内容との対応を確認する。

©ミライコーチング

2. 焦点を元の内容に戻して読む

解説

強調構文を正確に読むには、It is / was と that の間の語句が、元の内容でどの役割を持っていたかを確認する必要がある。

先ほどの出来事を、S・V・O・M で整理してみよう。

The school art club painted a large wooden sign on Saturday.

- S（主語）：the school art club
- V（動詞）：painted
- O（目的語）：a large wooden sign
- M（修飾語）：on Saturday

S は「誰が」、O は「何を」、M は「いつ」という情報を担っている。

強調構文では、このうちの一部分を It was と that の間へ移した形で表せる。

名詞句が焦点になる場合

解説

まず、「誰が看板を描いたか」を強調する形を見よう。

It was the school art club that painted a large wooden sign on Saturday.

焦点は the school art club である。この名詞句を元の内容へ戻すと、次の関係になる。

〈The school art club〉 painted 〈a large wooden sign〉 (on Saturday).

the school art club が S、a large wooden sign が O、on Saturday が M である。

一方、「何を描いたか」を強調すると、英文は次のように変わる。

It was a large wooden sign that the school art club painted on Saturday.

焦点は a large wooden sign である。元の内容へ戻すと、the school art club が S、painted が V、a large wooden sign が O になる。

つまり、**It was の後ろに置かれているからといって、焦点が必ず S になるわけではない。**

焦点の役割は、元の内容の中で判断する。

まとまりを読むための記号

英文の構造を説明する際は、必要に応じて次の記号を使う。

記号	働き	読み方
〈 〉	名詞の働きをするまとまり	S・O・C などになる
〔 〕	形容詞の働きをするまとまり	名詞を説明する
( )	副詞の働きをするまとまり	時・場所などを表し、動詞や文を説明する

例えば、〈the poster 〔near the gate〕〉では、near the gate が poster を説明しているため、形容詞の働きをする。名詞句全体は 〈 〉 で捉える。

一方、painted a large wooden sign (on Saturday)では、on Saturday が描いた時を表すため、副詞の働きをする。

これらは語の品詞ではなく、**まとまり全体が文中で果たす働き**を示す記号である。

S は主語、V は述語動詞、O は目的語、C は補語、M は修飾語を表し、V には下線を用いる。M は「省略可能」という意味ではない。

強調構文の構造図では、原文の語順を保ちながら、外側の It is / was … that と元の内容における S・V・O・M を別の層で示し、同じ層に役割を重複させない。形式主語の文では、表面上の S（It）と that 内容節の内部骨格を区別する。

〈The school art club〉 painted 〈a large wooden sign〉 (on Saturday).
S V O M

It was 〈the school art club〉 that painted 〈a large wooden sign〉 (on Saturday).
S V O M

S “the school art club” / 元内容 S・焦点 / 強調構文の焦点。元の内容では painted の主語。

It was 〈a large wooden sign〉 that 〈the school art club〉 painted (on Saturday).
O S V M

O “a large wooden sign” / 元内容 O・焦点 / 強調構文の焦点。元の内容では painted の目的語。

時の表現が焦点になる場合

解説

時を強調する場合も、元の内容へ戻す方法が役に立つ。

It was on Saturday that the school art club painted a large wooden sign.

焦点は on Saturday であり、元の内容では時を表す M である。

ここで、that の後ろを確認してみよう。

the school art club painted a large wooden sign

この部分には、すでに S・V・O が揃っている。名詞句を強調した場合とは違い、主語や目的語が抜けているわけではない。

それでも、on Saturday を元の内容に戻せば、看板を描いた時を示す M として自然につながる。

したがって、**that の後ろに S や O の欠けた部分があるかどうかだけでは、強調構文を判断できない。** 特に時の表現を強調する場合は、that 以下が SVO として完成していることもある。

「何が抜けているか」だけでなく、「焦点を戻すと、どの情報になるか」を確かめることが重要である。

It was (on Saturday) that 〈the school art club〉 painted 〈a large wooden sign〉.
M S V O

M “on Saturday” / 元内容 M・焦点 / 強調構文の焦点。元の内容では painted の時を表す修飾語。

3. 形式主語 it との違い

解説

It is / was … that という見た目でも、強調構文とは限らない。

次の英文を比べよう。

It was on Saturday that the club painted the sign.

「その部が看板を描いたのは、土曜日だった。」

It is clear that the club painted the sign on Saturday.

「その部が土曜日に看板を描いたことは明らかだ。」

最初の英文では、on Saturday が焦点になっている。元の内容は The club painted the sign on Saturday.であり、時を表す部分が強調されている。

しかし、2 番目の英文では、clear を元の内容の S・O・M として戻すことはできない。

この場合、It は**形式主語**であり、that 以下が本来の主語に当たる内容を表している。

that the club painted the sign on Saturday という名詞節全体が、「その部が土曜日に看板を描いたということ」を表し、それについて clear（明らかだ）と述べているのである。

It was (on Saturday) that 〈the club〉 painted 〈the sign〉.
M S V O

M “on Saturday” / 元内容 M・焦点 / 強調構文の焦点。元の内容では painted の時を表す修飾語。

It is clear 〈that 〈the club〉 painted 〈the sign〉 (on Saturday)〉.
S V C

S “It” / 形式主語
C “clear” / clear は that 以下の内容を評価する補語。that 内容節全体が本来の主語に当たる。

It is clear 〈that 〈the club〉 painted 〈the sign〉 (on Saturday)〉.
S V O M

S “the club” / that 内容節の内部主語。外側の形式主語 It とは別の階層。

形式主語 it と that 節

It is / was ＋ 評価・状態などを表す語句 ＋ that 節

この形では、it が形式的に主語の位置を占め、後ろの that 節が本来の主語に当たる内容を表すことがある。

例えば、It is clear that … では、that 以下の内容について「明らかだ」と評価している。

この場合、強調構文のように特定の語句を焦点として取り出しているわけではない。

解説

2 つの構文を見分ける際は、It is / was と that の間の部分が、どのような働きをしているかに注目する。

強調構文なら、間にある語句を元の内容へ戻すと、S・O・M などの役割が確認できる。

©ミライコーチング

形式主語の構文なら、that 節全体が「〜ということ」という名詞の内容を表し、その内容について評価や状態を述べている。

なお、that 以下に S・V・O が揃っているというだけで、形式主語だと決めることもできない。時の表現を強調した構文でも、同じ状態になることがある。

判断の中心になるのは、**語順の見た目ではなく、各部分がどの内容と結び付いているか**である。

強調と時制を取り違えない

強調構文の is / was は、強調する形を作る要素である。

元の出来事が過去・現在のどちらを表すかは、that 以下の動詞や時を表す語句も見て判断する。

また、強調を訳すときに「〜だけ」「唯一の〜」などの表現を機械的に付け加えてはいけない。

強調構文は特定の情報を目立たせるが、そのことだけで他の可能性をすべて排除するとは限らない。

4. 例題

1

次の英文を読み、設問に答えよ。

It was our art teacher that chose the final design for the poster.

a. 焦点となっている部分を示し、元の内容の中で S・O・M のどの役割を担うか、構造上の根拠とともに答えよ。

b. 英文全体を自然な日本語に訳せ。

解説

例題 1 の解答・解説

a. 構造と根拠

焦点は **our art teacher** である。It was と that の間に置かれている名詞句であり、元の内容の中では S（主語）の役割を担う。

焦点を元の内容へ戻すと、次の形になる。

Our art teacher chose the final design for the poster.

- S：our art teacher
- V：chose
- O：the final design for the poster
- for the poster：O の内部で design を説明し、用途を表す部分。この教材では名詞句全体を O とする修飾分析を採る。

chose は「選んだ」という過去形である。誰が選んだのかを確認すると、our art teacher がその動作の主体になる。

ここで注意したいのは、It was を元の内容の S・V としてそのまま扱わないことである。It was … that は強調するための外側の形であり、選んだという出来事の中心は chose である。

b. 全文和訳
直訳： ポスターの最終デザインを選んだのは、私たちの美術の先生だった。

満点の訳： ポスターの最終デザインを選んだのは、私たちの美術の先生だった。

訳のポイント

our art teacher を文頭の「選んだ人」としてただ置き換えるだけでなく、「選んだのは〜だった」という形にすると、原文の焦点を自然に表せる。

chose の過去の意味も保つ。なお、「美術の先生」ではなく「美術教師」と訳しても、意味は変わらない。

It was 〈our art teacher〉 that chose 〈the final design 〔for 〈the poster〉〕〉.
S V O

S “our art teacher” / 元内容 S・焦点 / 強調構文の焦点。元の内容では chose の主語。
O “the final design for the poster” / この教材では for the poster を design の用途を表す形容詞句とし、目的語全体に含める。

2

次の英文を読み、設問に答えよ。

It was on Wednesday afternoon that the bakery received its new oven.

語注：bakery「パン屋、パン製造店」／receive「受け取る」／oven「オーブン」

a. 焦点となっている部分を示し、元の内容の中で S・O・M のどの役割を担うか、構造上の根拠とともに答えよ。

b. 英文全体を自然な日本語に訳せ。

解説

例題 2 の解答・解説

a. 構造と根拠

焦点は **on Wednesday afternoon** である。元の内容では、パン屋が新しいオーブンを受け取った時を表す M（修飾語）に当たる。

焦点を戻すと、次の内容になる。

The bakery received its new oven on Wednesday afternoon.

- S：the bakery
- V：received
- O：its new oven
- M：on Wednesday afternoon

that 以下の the bakery received its new oven には S・V・O が揃っている。

しかし、on Wednesday afternoon は「いつ受け取ったのか」という情報を補う。そのため、主語や目的語が欠けていなくても、時を表す部分が強調されていると判断できる。

また、its は the bakery を受ける所有格である。受け取ったものが、そのパン屋の新しいオーブンであることを保って読む。

b. 全文和訳
直訳： そのパン屋が自分の新しいオーブンを受け取ったのは、水曜日の午後だった。

満点の訳： そのパン屋が新しいオーブンを受け取ったのは、水曜日の午後だった。

訳のポイント

「水曜日の午後にパン屋がオーブンを受け取った」という出来事だけを伝える訳でも、基本的な内容は分かる。

ただし、原文では on Wednesday afternoon が焦点になっているため、「受け取ったのは水曜日の午後だった」とすると、強調されている情報が明確になる。

its の所有関係は、自然な日本語で意味が明らかな場合、「自分の」を省いてもよい。別の店のオーブンを受け取ったという意味に変えてはいけない。

It was (on 〈Wednesday afternoon〉) that 〈the bakery〉 received 〈its new oven〉.
M　S　V　O

M “on Wednesday afternoon” / 元内容 M・焦点 / 強調構文の焦点。元の内容では received の時を表す修飾語。

5. 演習問題

次の各英文を読み、設問 a・b に答えよ。

設問 a では、強調構文なら焦点と元の内容での役割を示せ。形式主語の構文なら、**焦点なし**と答え、it と that 節の関係を示せ。いずれも判断の根拠を説明すること。

1

It was the team captain that explained the new rules to the players before practice.

語注：captain「主将、キャプテン」

a. 焦点の有無を判断し、焦点があればその部分と元の内容での役割を、なければ it と that 節の関係を、構造上の根拠とともに示せ。

b. 英文全体を自然な日本語に訳せ。

2

It was the small blue notebook that Naomi left on the train yesterday afternoon.

a. 焦点の有無を判断し、焦点があればその部分と元の内容での役割を、なければ it と that 節の関係を、構造上の根拠とともに示せ。

b. 英文全体を自然な日本語に訳せ。

3

It was after the final bell that the students decorated the classroom for the school festival.

語注：final bell「最後のチャイム、授業終了を知らせるチャイム」／decorate「飾り付ける」

a. 焦点の有無を判断し、焦点があればその部分と元の内容での役割を、なければ it と that 節の関係を、構造上の根拠とともに示せ。

b. 英文全体を自然な日本語に訳せ。

4

It was at eight on Sunday morning that the volunteers planted new trees in the park.

語注：volunteer「ボランティア、志願者」／plant「植える」

a. 焦点の有無を判断し、焦点があればその部分と元の内容での役割を、なければ it と that 節の関係を、構造上の根拠とともに示せ。

b. 英文全体を自然な日本語に訳せ。

5

It is surprising that the younger students solved the difficult puzzle without any help.

語注：surprising「驚くべき、意外な」／solve「解く、解決する」

a. 焦点の有無を判断し、焦点があればその部分と元の内容での役割を、なければ it と that 節の関係を、構造上の根拠とともに示せ。

b. 英文全体を自然な日本語に訳せ。

6

It was a relief that the concert tickets arrived before the class trip.

語注：a relief「ほっとすること、安心できること」／arrive「到着する、届く」

a. 焦点の有無を判断し、焦点があればその部分と元の内容での役割を、なければ it と that 節の関係を、構造上の根拠とともに示せ。

b. 英文全体を自然な日本語に訳せ。

©ミライコーチング

6. 演習問題の解答・解説

1

演習 1 の解答・解説

英文

It was the team captain that explained the new rules to the players before practice.

a. 構造と根拠

焦点は **the team captain** である。元の内容の中では S（主語）の役割を担う。

焦点を元の内容へ戻すと、次のようになる。

The team captain explained the new rules to the players before practice.

- S：the team captain
- V：explained
- O：the new rules
- to the players：説明を受けた相手
- M：before practice

explained の動作を行ったのは the team captain である。

したがって、It was the team captain that … という形は、「誰が新しいルールを説明したのか」に焦点を当てている。

the new rules は説明された内容であり、the players は説明を受けた相手である。この 2 つを取り違えない。

b. 全文和訳

直訳： 練習の前に選手たちに新しいルールを説明したのは、チームの主将だった。

満点の訳： 練習前に選手たちへ新しいルールを説明したのは、チームのキャプテンだった。

訳のポイント

原文が強調しているのは説明した人物であり、説明した内容や時ではない。

「チームの主将が練習前に選手たちに新しいルールを説明した」と訳しても出来事は伝わるが、「説明したのは〜だった」とする方が焦点を明確に表せる。

captain は文脈に応じて「主将」「キャプテン」のどちらでもよい。

It was 〈the team captain〉 that explained 〈the new rules〉 (to 〈the players〉) (before practice).
S V O M M

S “the team captain” / 元内容 S・焦点 / 強調構文の焦点。元の内容では explained の主語。
M “to the players” / 説明を受けた相手を表す前置詞句。
M “before practice” / 説明した時を表す修飾語。

2

演習 2 の解答・解説

英文

It was the small blue notebook that Naomi left on the train yesterday afternoon.

a. 構造と根拠

焦点は **the small blue notebook** である。元の内容の中では O（目的語）の役割を担う。

焦点を元の内容へ戻すと、次の関係になる。

Naomi left the small blue notebook on the train yesterday afternoon.

- S：Naomi
- V：left
- O：the small blue notebook
- M：on the train
- M：yesterday afternoon

Naomi が電車に置いてきた対象は the small blue notebook である。

that 以下の Naomi left on the train yesterday afternoon では、left の目的語に当たる部分が表面上現れていない。その対象を It was と that の間に置くことで、何を電車に置いてきたのかが強調されている。

ここで、the small blue notebook は主語ではない。元の動作主体は Naomi であり、ノートは電車に置いてきた対象である。

b. 全文和訳

直訳： ナオミが昨日の午後に電車の中に置いてきたのは、その小さな青いノートだった。

満点の訳： 昨日の午後、ナオミが電車に置いてきたのは、小さな青いノートだった。

訳のポイント

「ナオミが電車に置いてきた」という関係を先に読み取り、その対象がノートであることを確認する。

原文が焦点としているのは the small blue notebook である。

「ナオミが小さな青いノートを電車に置いてきた」という訳も出来事の内容は保つが、「置いてきたのは〜だった」という表現なら、原文の強調をより明確に残せる。

small と blue は、どちらも notebook を説明している。ノートの大きさと色を落とさず訳す。

It was 〈the small blue notebook〉 that Naomi left (on 〈the train〉) (yesterday afternoon).
O S V M M

O “the small blue notebook” / 元内容 O・焦点 / 強調構文の焦点。元の内容では left の目的語。left だけでは置き忘れたと断定しない。

3

演習 3 の解答・解説

英文

It was after the final bell that the students decorated the classroom for the school festival.

a. 構造と根拠

焦点は **after the final bell** である。元の内容の中では M（修飾語）の役割を担い、教室を飾り付けた時を表している。

焦点を元の内容へ戻すと、次の形になる。

The students decorated the classroom for the school festival after the final bell.

- S：the students
- V：decorated
- O：the classroom
- M：for the school festival
- M：after the final bell

the students decorated the classroom という部分だけで、誰が何を飾り付けたのかが分かる。after the final bell は、その行動がいつ行われたのかを補っている。

that 以下には the students（S）、decorated（V）、the classroom（O）が揃っているが、時を表す M が焦点になっているため、強調構文として成立する。

b. 全文和訳

直訳： 生徒たちが学校の文化祭のために教室を飾り付けたのは、最後のチャイムの後だった。

満点の訳： 生徒たちが文化祭に向けて教室を飾り付けたのは、授業終了のチャイムが鳴った後だった。

訳のポイント

after the final bell が表すのは、飾り付けが行われた時である。

「チャイムが鳴ったので飾り付けた」とすると、原文に明示されていない理由の関係を加えることになる。

after は時間的な前後関係を表しているため、「チャイムの後に」という意味を保つ。

for the school festival は、飾り付けの目的を表す。「文化祭のために」「文化祭に向けて」など、自然な言い換えができる。

It was (after 〈the final bell〉) [M] that 〈the students〉 [S] decorated [V] 〈the classroom〉 [O] (for 〈the school festival〉) [M].

M “after the final bell” / 元内容 M・焦点 / 強調構文の焦点。元の内容では decorated の時を表す修飾語。
M “for the school festival” / 飾り付けの目的を表す修飾語。

4

演習 4 の解答・解説

英文

It was at eight on Sunday morning that the volunteers planted new trees in the park.

a. 構造と根拠

焦点は **at eight on Sunday morning** である。元の内容の中では、木を植えた時を表す M（修飾語）の役割を担う。

焦点を戻すと、次の内容になる。

The volunteers planted new trees in the park at eight on Sunday morning.

- S：the volunteers
- V：planted
- O：new trees
- M：in the park
- M：at eight on Sunday morning

at eight と on Sunday morning は、合わせて「日曜日の朝 8 時」という時点を表している。

一方、in the park は場所を表す M であり、今回の焦点には含まれない。

that 以下の the volunteers planted new trees in the park には、木を植えた人・植えた行為・植えた対象・場所が示されている。その出来事が起きた時に注目させる構文である。

b. 全文和訳

直訳： ボランティアたちが公園に新しい木を植えたのは、日曜日の朝 8 時だった。

満点の訳： ボランティアたちが公園に新しい木を植えたのは、日曜日の午前 8 時だった。

訳のポイント

at eight on Sunday morning を一まとまりで捉え、曜日と時刻の両方を保つ。「日曜日に」「朝 8 時に」のどちらか一方だけにすると、原文の時の情報が欠ける。

また、焦点になっているのは時刻であり、公園という場所ではない。

「日曜の朝 8 時だった」「日曜日の午前 8 時だった」は、どちらも元の時点と強調を保った訳として自然である。

It was ((at eight) (on 〈Sunday morning〉)) that 〈the volunteers〉 planted 〈new trees〉 (in 〈the park〉).
M　S　V　O　M

M “at eight on Sunday morning” / 元内容 M・焦点 / 強調構文の焦点。元の内容では planted の時を表す修飾語全体。

5

演習 5 の解答・解説

英文

It is surprising that the younger students solved the difficult puzzle without any help.

a. 構造と根拠

焦点なし。

この英文は、強調構文ではなく、形式主語 it を用いた構文である。

構造は次のように捉える。

- 形式主語：It
- V：is
- C：surprising
- 本来の主語に当たる内容：that the younger students solved the difficult puzzle without any help

that 以下の名詞節全体が、「年下の生徒たちが助けを借りずに難しいパズルを解いたこと」を表している。

この名詞節の内部では、the younger students が S、solved が V、the difficult puzzle が O である。without any help は、助けを借りなかったという状況を表す。

It is surprising は、that 節が表す内容について「驚くべきことだ」と評価している。

強調構文なら、It is と that の間の部分を元の内容へ戻すことができる。しかし、surprising を the younger students solved the difficult puzzle without any help の S・O・M として戻すことはできない。

そのため、surprising を強調の焦点とせず、that 節全体を評価する補語として捉える。

b. 全文和訳

直訳： 年下の生徒たちが何の助けもなくその難しいパズルを解いたことは、驚くべきことだ。

満点の訳： 年下の生徒たちが何の助けも借りずに難しいパズルを解いたとは、驚きだ。

訳のポイント

この英文では、特定の人や時を強調しているのではなく、that 以下の出来事全体を評価している。

したがって、「〜したのは surprising だった」と強調構文の形に無理に当てはめない。

「〜ということは驚くべきことだ」「〜したとは驚きだ」などの形が自然である。

without any help の「助けを借りずに」という意味も落とさない。

It (S) is (V) surprising (C) 〈that 〈the younger students〉 solved 〈the difficult puzzle〉 (without 〈any help〉)〉.

S “It” / 形式主語
C “surprising” / surprising は that 内容節全体を評価する補語。that 内容節は本来の主語に当たり、強調の焦点ではない。

It is surprising 〈that 〈the younger students〉 (S) solved (V) 〈the difficult puzzle〉 (O) (without 〈any help〉)〉 (M).

S “the younger students” / that 内容節の内部主語。外側の形式主語 It とは別の階層。

6

演習 6 の解答・解説

英文

It was a relief that the concert tickets arrived before the class trip.

a. 構造と根拠

焦点なし。この英文も、形式主語 it を用いた構文である。

構造は次のようになる。

- 形式主語：It
- V：was
- C：a relief
- 本来の主語に当たる内容：that the concert tickets arrived before the class trip

that 節全体が、「コンサートのチケットがクラス旅行の前に届いたこと」という内容を表している。名詞節の内部では、the concert tickets が S、arrived が V、before the class trip が M である。

a relief は、その出来事について「ほっとすること」「安心できること」と述べる補語である。

ここで、a relief を焦点とする強調構文だと考えると、元の内容の中へ戻す役割が見つからない。一方、that 節全体を主語に当たる内容として考えると、「チケットが旅行前に届いたことは安心できることだった」という意味が自然に成立する。この構造上の対応から、形式主語の構文と判断できる。

b. 全文和訳

直訳： コンサートのチケットがクラス旅行の前に届いたことは、安心できることだった。

満点の訳： コンサートのチケットがクラス旅行の前に届いて、ほっとした。

訳のポイント

a relief は、出来事に対する安心感を表している。「ほっとした」という日本語へ整えてもよいが、原文に書かれていない特定の人物を、安心した人として決め付けない。

また、before the class trip は、チケットが届いた時期を示している。旅行前に届いたという時間関係を保持する。

この英文の was は過去の評価を表しているため、「ほっとした」「安心できることだった」という過去の意味で訳す。

形式主語の構文では、that 節の内容全体を受け止めてから、その内容に対する評価を日本語に表すことが大切である。

It　was　〈a relief〉　〈that　〈the concert tickets〉　arrived　(before　〈the class trip〉)〉 .
S　V　C

S “It” / 形式主語
C “a relief” / a relief は that 内容節全体を評価する補語。that 内容節は本来の主語に当たり、強調の焦点ではない。

It was a relief　〈that　〈the concert tickets〉　arrived　(before　〈the class trip〉)〉.
S　V　M

S “the concert tickets” / that 内容節の内部主語。外側の形式主語 It とは別の階層。